

情動認識力が他者認識力に与える影響

Effects of self-awareness of emotions on awareness of others

酒 井 久実代

Kumiyo SAKAI

Abstract

Questionnaires of self-awareness of emotions and awareness of others were developed and administered to 481 university students. Three factors were extracted by factor analysis as one expected. The three factor model of understanding emotions, analysis of emotions, and sensory grasp of emotions was supported by confirmatory factor analysis. And the model of self-awareness of emotions affecting awareness of others was supported by covariance structure analysis. It was discussed that modification of the questionnaires and investigation of the relationship between self-awareness of emotions and emotional intelligence was needed.

keywords : self-awareness of emotions, awareness of others, covariance structure analysis, emotional intelligence

I . 問 題

カウンセリングにおいては、カウンセラーのクライアント理解はカウンセラーの自己理解の範囲を超えることはないと言われている。クライアント理解の中でも重要なのはクライアントの感情の理解であるが、カウンセラーが自己の感情を理解していない場合はクライアントのそれを理解するのは難しい。たとえば、カウンセラーが嫉妬という感情を自己の体験として理解していない場合には、クライアントの中にあるそれを読み取ることはできないのではないかと思われる。これは日常の人間関係においても同様であり、他者の感情のうち理解できるものは、自己の中にある感情だけなのかもしれない。

これまでに自己理解と他者理解との間には密接な関連性があることを前提としたいくつかの心理学的概念が提示されてきた。たとえば Thorndike は1920年に具体的知能、抽象的知能に加えて社会的知能 (social intelligence) という概念を初めて提示したが、そこでの定義は“人間関係の中でうまくふるまうために、人々を理解する能力。自分自身と他者の内的状態、動機、行動を知覚し、その情報に基づいてそれらに対して最善の行為をなす能力”となっている (Salovey &

Mayer, 1990)¹⁰⁾。この定義では人の内的状態、動機、行動を理解する能力を社会的知能としているが、ここでの人は自己と他者の両者を含んだものである。Guilford (1967)⁵⁾は人間の知性をあらゆる情報処理過程で作用する知的能力として理解し、知性構造論を提案しているが、その中の一つが人間の行動を刺激とする情報処理に関する知性である行動的知能である。行動的知能を測定するためのテストとして、類似した精神状態を表す2つの顔を選ばせる顔テスト、類似した精神状態を表す顔と声を合わせるテスト、顔の表情と精神状態に関する説明文とを合わせるテストなどが考案されている。行動的知能は自己と他者に分けて概念化されているが、両者を合わせたものが行動的知能とされている。

Gardner (1983)²⁾は多重知能論を展開し、空間的知能、論理数学的知能、身体運動的知能、言語的知能、音楽的知能とともにパーソナル・インテリジェンス (personal intelligence) を概念化した。パーソナル・インテリジェンスはインター・パーソナル・インテリジェンス (inter-personal intelligence) とイントラ・パーソナル・インテリジェンス (intra-personal intelligence) の2つに分けられた。インター・パーソナル・インテリジェンスは他者の認知、すなわち他者を直接的に知覚し、他者の感情を象徴化し、他者についての全体的なメタファーを理解するという側面と、文化の

理解，すなわちコミュニティの要求，特定の期待を認識し，自分の属する社会について多くを知っているという2つの側面を持つ。一方，イントラ・パーソナル・インテリジェンスは自己の感情の象徴化と自己の客観視という2つの側面を持つとされた。両者は相互依存的に発達し，青年期になると自己と他者についての成熟した知識を持つようになると考えられた。このパーソナル・インテリジェンス概念に大きな影響を受け，Salovey & Mayer (1990)¹⁰⁾が提唱した概念がエモーショナル・インテリジェンス (emotional intelligence) である。エモーショナル・インテリジェンスは情動の評価と表現，情動の制御，情動の利用という3つの側面がある。Mayer & Salovey (1997)⁶⁾では情動の理解・分析という要素も加えられた。情動の評価と表現とは，情動を認知し，言語化するなどの表現をすることを指している。自己と他者に分かれており，他者の情動の評価と表現は共感性とされている。

以上のように，社会的知能，行動的知能，パーソナル・インテリジェンス，エモーショナル・インテリジェンスは自己理解と他者理解の両者の側面を含んでおり，両者には密接な関連性があることを前提とした概念であると言える。しかし両者を分けて概念化しているということは，同一のものであるとはみなしていないということである。両者の間にどのような関連性があるかについては，実証的な検討はほとんどなされていない。

酒井 (2000)⁸⁾は自己の情動を認識する能力を情動認識力，他者を認識する能力を他者認識力と定義・測定し，両者の相関係数を算出したところ，1%水準で有意な0.32という結果を得た。この結果は両者には関連性があることを実証的に示しているが，どのような関連性があるかまでは検討されていない。そこで本研究では，この両者の関連性についてより詳細に検討することを目的とする。

まず，自己の情動を理解する能力を情動認識力 (self-awareness of emotions) として概念化した。情動 (emotion) とは，感情と感情に伴う身体的変化，自律神経変化，心理変化のすべてを包含する過程 (梅本，1994)¹³⁾と定義されている。情動認識力は，「自己の情動に気づき，言語化することによって，分化して認識する能力」(酒井，1999⁷⁾，2000⁸⁾，2006⁹⁾)である。Gardner (1983)²⁾は自己の感情の象徴化をパーソナル・インテリジェンスの本質としており，Goleman (1995)⁴⁾はエモーショナル・インテリジェンスの根幹となる能力を，

現在進行中の自己の心的状態を認識することとし，それを情動の自己認識力と名づけていることから，情動認識力はパーソナル・インテリジェンスとエモーショナル・インテリジェンスの基礎にある能力と考えられる。またパーソナル・インテリジェンスとエモーショナル・インテリジェンス概念の中に含まれている「他者の情動に気づき，言語化することによって，分化して認識する能力」を他者認識力と定義した。他者認識力はインター・パーソナル・インテリジェンスの2つの側面のうちの他者の認知に該当する。他者の感情を象徴化し認識することは，複数の他者からなる所属集団のもつ要求や期待などの理解のための基本的な能力と考え概念化した。情動認識力と他者認識力との関連性については，上記のパーソナル・インテリジェンスとエモーショナル・インテリジェンス概念のとらえ方から情動認識力が最も基礎的な能力と位置づけられているので，情動認識力が他者認識力のある程度規定するという因果関係が考えられた。

次にこれらの2つの能力を測定するための質問紙尺度を作成した。情動認識力はその定義から3つの構成要素からなると考えられた。1つ目は自己の情動の認知，2つ目は情動の分析，3つ目は情動の理解である。これらの要素を測定するための質問項目を作成した。その際，情動認識力と概念的関連の深いエモーショナル・インテリジェンス尺度 (Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998)¹¹⁾の項目を一部使用した。同様に他者認識力を測定するための尺度を作成した。最後に情動認識力が他者認識力に影響を与えているとするモデルを作成し，それがデータにより支持されるかどうかを共分散構造分析を用いて検討した。

II. 方 法

1) 調査対象者

東京都内私立大学学生481名(男子126名, 女子355名)

2) 手続き

情動認識力尺度，他者認識力尺度を授業中に集団で実施した。調査は，ものごとに対する感じ方，考え方などの個人差を測定することを目的としていること，全体としての回答結果が集計・分析されるので個々の回答者に迷惑がかかることはないこと，強制ではなく，やりたくない人はやらなくても良いことなどを説明してから行われた。

3) テスト内容

①情動認識力尺度

情動認識力の定義を基にして尺度を作成した。情動の理解に関する項目は4項目で、そのうちの1項目はエモーショナル・インテリジェンス尺度の項目を利用した。情動の認知に関する項目は3項目で、そのうちの1項目はエモーショナル・インテリジェンス尺度の項目であった。情動の分析に関する項目は2項目作成した。項目内容はTable 1に示した。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。得点が高くなるほど、情動認識力が高いと考えられた。

②他者認識力尺度

他者認識力は、他者の情動を対象とした情動認識力であると考え、「他者の情動に気づき、言語化することによって分化して認識する能力」と定義した。その定義に基づき、他者の情動の認知、他者の情動の分析、他者の情動の理解という3つの構成要素を考えた。それぞれを測定するための項目を作成した。他者の情動の理解に関する項目は5項目で、そのうちの1項目はエモーショナル・インテリジェンス尺度の項目であった。他者の情動の認知に関する項目は3項目で、そのうち1項目はエモーショナル・インテリジェンス尺度の項目であった。他者の情動の分析に関する項目は2項目作成した。項目内容はTable 2に示した。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。得点が高くなるほど、他者認識力が高いと考えられた。

III. 結 果

1) 情動認識力の構造

情動認識力尺度9項目に対し主因子法による因子分析を行った。固有値1.0以上の基準で3因子が抽出された(回転前の累積寄与率=38.63%)。プロマックス回転後、各因子に含まれる項目を見ると、第1因子に情動理解に関する3項目と情動認知に関する1項目、第2因子に情動の分析に関する2項目、第3因子に情動の認知に関する3項目が見られた(Table 1参照)。

第1因子には情動の変化の認知に関する項目が含まれた。この項目は第3因子にも因子負荷が見られたが、第3因子に含まれている項目が情動の感覚的な認知に関する項目であるのに対して、変化の認知は情動のより知的な理解に近いと考えられたので、第1因子の項目として残した。第1因子は情動の理解と名づけられた。第2因子には情動の分析に関する項目が集まったので、情動の分析と名づけられた。第3因子には情動の感覚的な認知に関する項目が集まったので、情動の感覚的な認知と名づけられた。因子間相関は第1因子と第2因子の間が.45、第1因子と第3因子の間が.46、第2因子と第3因子の間が.45であった。情動認識力尺度9項目のクロンバックの α 係数は.70であった。

以上の探索的な因子分析結果をもとにして、共分散構造分析による確認的因子分析を行った。Amos 5.0を使用した。結果はFigure 1に示した。適合度指標のGFIは.960と高く、モデルとデータの適合度は高かった。情動認識力から各因子への影響指標は、いずれも1%水準で有意であった。情動認識力が情動の感覚的な認知、情動の分析、情動の理解によって測定されると

Table 1 情動認識力尺度の因子負荷行列 (主因子法, プロマックス回転後)

	第1因子 (情動の理解)	第2因子 (情動の分析)	第3因子 (情動の認知)
私は自分がどうしてそのように感じるのか理解するのが難しい*	.731	-.124	-.170
私はなぜ自分の気持ちが変わったのかが分かる+	.567	.063	.023
私は自分の複雑な気持ちを理解する	.559	-.004	.138
私は自分の気持ちが変わったのに気がつく	.387	.130	.232
私は自分の気持ちを分析する	.106	.789	-.087
私は自分の気持ちについて考える	-.147	.779	.038
私は自分の声の調子で自分が感じている気持ちに気がつく	-.088	-.063	.686
私は自分の身体感覚から自分の気持ちに気がつく	-.022	.011	.433
私は自分が他者に送っている言語以外のメッセージに気づいている+	.120	.005	.325
固有値	1.79	1.68	1.40

*: 反転項目 +: エモーショナル・インテリジェンス尺度の項目

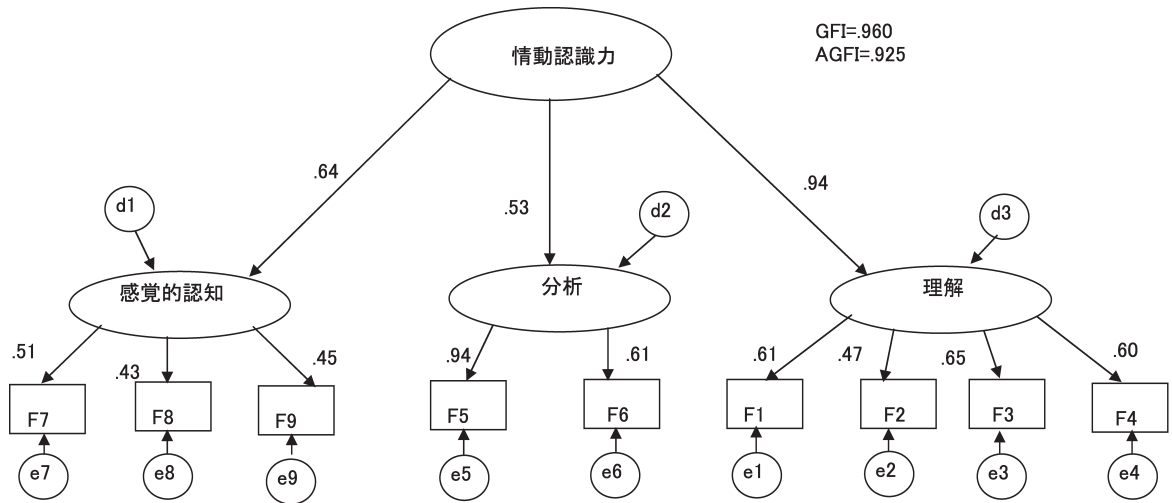


Figure 1 情動認識力モデル

するモデルは支持されたと見えよう。

2) 他者認識力の構造

他者認識力尺度10項目に対し主因子法による因子分析を行った。固有値1.0以上の基準で3因子が抽出された(回転前の累積寄与率=48.94%)。プロマックス回転後、各因子に含まれる項目を見ると、第1因子に他者の情動理解に関する3項目と情動認知に関する2項目、第2因子に他者の情動の認知に関する3項目、第3因子に他者の情動の分析に関する2項目が見られた(Table 2 参照)。

第1因子には他者の情動の変化の認知に関する項目が含まれた。この項目は内容的に情動の理解に近いと考えられたので、第1因子の項目として残した。また

情動の認知に関する項目が含まれていたが、これは第2因子にも因子負荷が高かったため削除した。第1因子は他者の情動理解と名づけられた。第2因子には他者の情動の認知に関する項目が集まったので、他者の情動認知と名づけられた。第3因子には他者の情動の分析に関する項目が集まったので、他者の情動の分析と名づけられた。因子間相関は第1因子と第2因子の間が.73、第1因子と第3因子の間が.48、第2因子と第3因子の間が.45であった。他者認識力尺度9項目のクロンバックの α 係数は.79であった。

以上の探索的な因子分析結果をもとにして、共分散構造分析による確認的因子分析を行った。Amos 5.0を使用した。結果はFigure 2に示した。適合度指標の

Table 2 他者認識力尺度の因子負荷行列(主因子法、プロマックス回転後)

	第1因子 (他者の情動の理解)	第2因子 (他者の情動の認知)	第3因子 (他者の情動の分析)
私は他者の複雑な気持ちを理解する	.707	.012	.103
私は他者の気持ちがなぜ変わったのかが分かる	.655	-.003	-.025
私は他者がどうしてそのように感じるのか理解するのが難しい**	.654	-.201	-.092
私は他者の気持ちが変わったのに気がつく	.585	.186	.035
私は他者の気持ちにすぐ気がつく	.537	.330	-.019
私は顔の表情を見ることでその人の気持ちに気がつく	-.119	.792	-.015
私は他者が示す言語以外のメッセージに気づく+	-.006	.714	-.026
私は人の声の調子でその人が感じている気持ちに気がつく	-.077	.670	.025
私は他者の気持ちを分析する	-.013	-.033	.807
私は他者の気持ちについて考える	-.060	.017	.689
固有値	3.19	3.05	1.93

*: 反転項目 *: エモーショナル・インテリジェンス尺度の項目

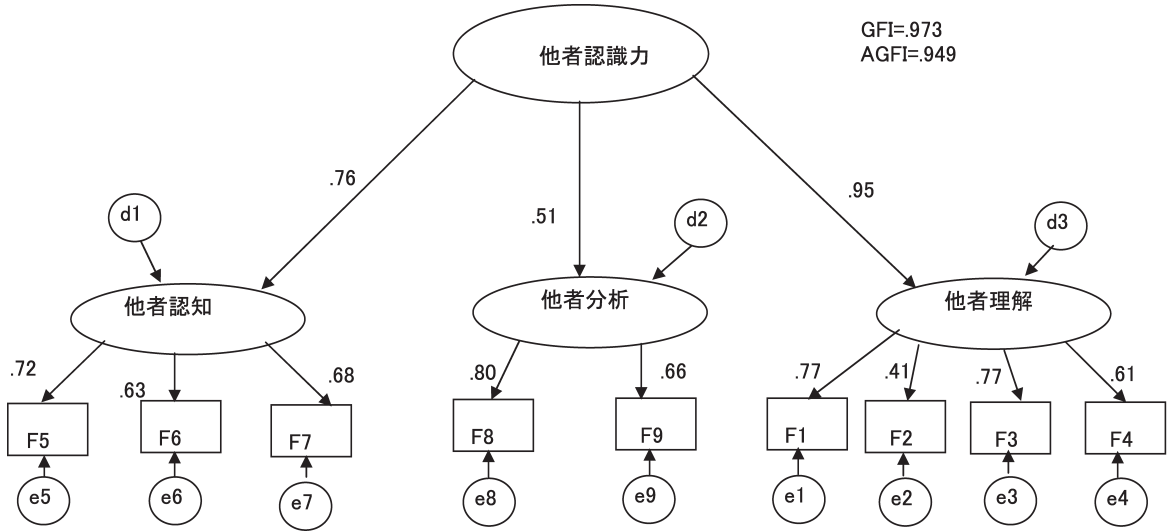


Figure 2 他者認識力モデル

GFIは.973と高く、モデルとデータの適合度は高かった。他者認識力から各因子への影響指標は、いずれも1%水準で有意であった。他者認識力が他者の情動認知、他者の情動分析、他者の情動理解によって測定されるとするモデルは支持されたと言えよう。

3) 情動認識力から他者認識力への影響

情動認識力が他者認識力に与える影響の強さを見るために、共分散構造分析を行った。結果をFigure 3に示した。適合度指標 GFIは.897と高く、モデルとデータの適合度は良好であった。情動認識力の各因子から他者認識力の各因子への影響指標で有意となったパスだけを示した。

力への影響指標は.73で1%水準で有意であった。情動認識力は他者認識力に有意な影響を与えていることが示された。

次に、情動認識力のどの側面が他者認識力のどの側面に影響を与えているかを細かく見るために、共分散構造分析を行った。結果をFigure 4に示した。適合度指標 GFIは.888と高く、モデルとデータの適合度は良好であった。情動認識力の各因子から他者認識力の各因子への影響指標で有意となったパスだけを示した。

自己の情動の感覚的認知は、他者の情動認知に最も

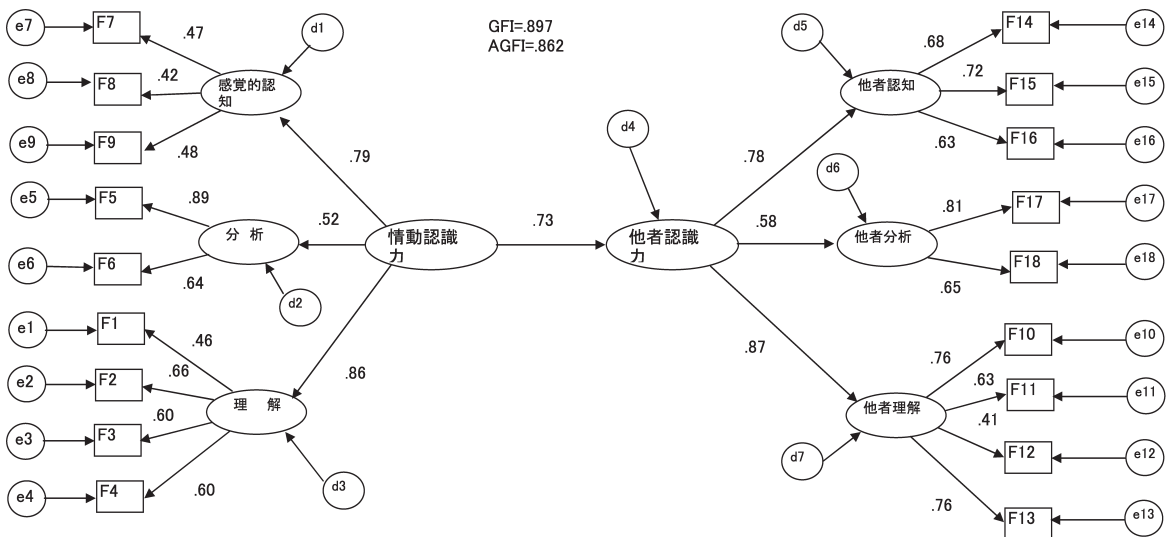


Figure 3 情動認識力と他者認識力①

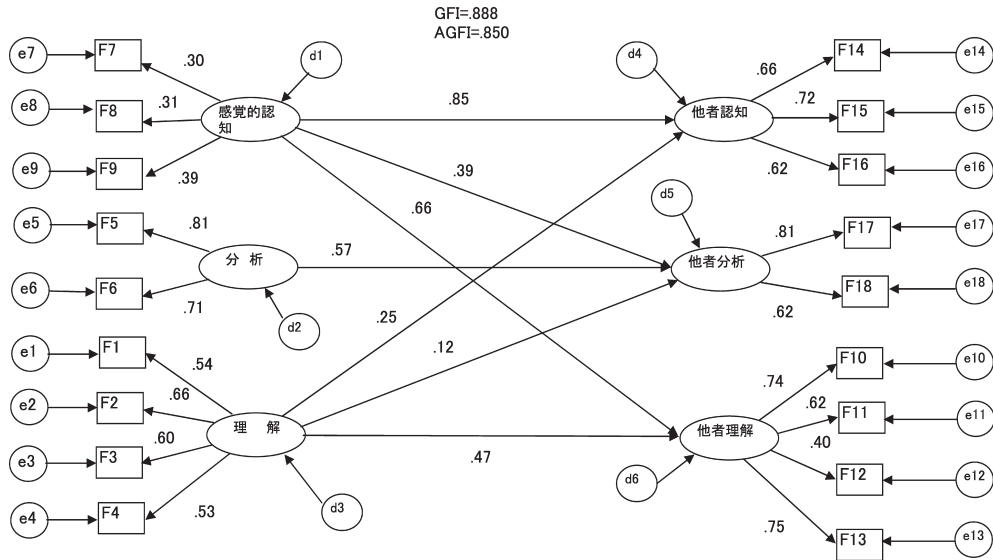


Figure 4 情動認識力と他者認識力②

強い影響を与えていた。また他者理解、他者分析への影響も1%水準で有意であった。自己の情動の感性的認知は他者認識の各因子に強い影響を与えていることが示された。自己の情動の分析は、他者の情動の分析にのみ1%水準で有意な影響を与えていた。自己の情動理解は他者の情動理解に1%水準で有意な強い影響を与えていたが、他者認知、他者分析にも有意な影響を与えていた。

IV. 考 察

本研究では、情動認識力尺度を作成し、因子分析によって情動認識力の構造について検討した。確認的因子分析によって、情動認識力が情動の感性的認知、情動の分析、情動の理解からなるとするモデルが支持された。感性的認知とは、声の調子や身体感覚から自己の情動に気づくという項目からなっており、言語を介さずに感性的に自己の情動を認知する因子だと考えられる。情動の分析とは、自己の情動を分析する、考えるという項目からなっており、自己の情動について内省し、分化して捉えようとする傾向を表す因子だと考えられる。情動の理解とは、自分がどうしてそのように感じるのか、なぜ気持ちが変わったのか、複雑な気持ちを理解するなどの項目からなっており、自己の情動についての洞察的な理解、複雑な認識を表す因子だと考えられる。因子分析をすることで、情動認識

力の構造をより明確化することができたと思われる。尺度の内の一貫性に関するクロンバックの α 係数の値は多人数を対象とした調査研究においては信頼性があるとみなせるものであったが、より項目数を増やして、十分な内的一貫性のある尺度に改良していく必要があるだろう。

他者認識力に関しても、尺度を作成し実施することで、その構造を明確化することができた。他者認識力は、他者の情動の認知、他者の情動の分析、他者の情動の理解からなるとするモデルが支持された。他者の情動の認知とは、他者の顔の表情、声の調子などの非言語的なメッセージに気づくという項目からなっており、他者の情動を感性的に認知する傾向を表す因子だと考えられる。他者の情動の分析とは、他者の情動を分析する、考えるという項目からなっており、他者の情動について思いをめぐらし、分化して捉えようとする傾向を表す因子だと考えられる。他者の情動の理解とは、他者の気持ちがなぜ変わったのか、どうしてそのように感じるのか、他者の複雑な情動の理解に関する項目からなっており、他者の情動に関する洞察的な理解、複雑な認識を表す因子だと考えられる。因子分析により他者認識力の構造も明確化することができたと思われる。尺度の信頼性に関しては情動認識力と同様な結果であり、今後さらに項目数を増やしてより内的一貫性のある尺度に改良していくことが望まれる。

次に情動認識力から他者認識力への影響について検

討した。情動認識力と他者認識力はイコールではないが、密接な関連性があると推察されたが、それがデータによっても確かめられた。特に自己の情動を感覚的に認知することが、他者の情動の認知や理解に強い影響を与えていることが示された。自己の情動の感覚的認知には身体感覚からの気づきに関する項目も含まれていた。Gendlin(1981村山他訳1982)³⁾は体験過程に注意を向け、それを象徴化する技法をフォーカシングと名づけたが、フォーカシングをする際には身体感覚からの気づきが必要だと考えられる。フォーカシングをする能力は実習をすることによって高めることができると考えられている。本研究による結果は、フォーカシングの実習をして自己の身体感覚からの気づきを高めていくことは、自己の情動の認識を高めるだけではなく、他者の情動の認知や理解にも影響を及ぼす可能性があることを示唆している。

本研究では、情動認識力と他者認識力を質問紙尺度を用いて測定することで、その構造をより明確化し、前者から後者への影響に関するより詳細な検討をすることができた。今後はさらに尺度の信頼性を高めるように工夫し、妥当性を確かめる研究を積み重ねていくことが必要である。

パーソナル・インテリジェンス、エモーショナル・インテリジェンスについては、その概念的な重要性は認識されているものの、実証的な測定は十分になされていないのが現状である。パーソナル・インテリジェンスを測定するテストは開発されていないのに対し、エモーショナル・インテリジェンスを測定するテストは数多く提案されている。しかし Sternberg & Kaufman (1998)¹²⁾は1990年代の知能に関する文献をレビューした中で、最後の項目としてエモーショナル・インテリジェンスを取り上げ、“その概念の存在を示すいくつかの証拠はあるが、十分な収束的・弁別的妥当性の検証が必要であろう”と結論づけている。Davis, Stankov, & Roberts (1998)¹³⁾はエモーショナル・インテリジェンスの妥当性を検証するために大規模な実証的検討を行った結果、知能の1つとしてのエモーショナル・インテリジェンス概念の有効性を支持する結果は得られなかったという。その中で、Davis et al. (1998)¹⁴⁾は情動の知覚因子を測定する信頼性のある尺度が開発されれば、エモーショナル・インテリジェンスの構成概念妥当性を示せるかもしれないが、その際にはエモーショナル・インテリジェンス概念はより範囲の狭められたものとなるであろうと結論づけている。

本研究で概念化した情動認識力と他者認識力は、エモーショナル・インテリジェンス概念を狭めたものの1つと位置づけることができる。Mayer & Salovey (1997)⁶⁾の定義では、エモーショナル・インテリジェンスは自己と他者の情動の評価と表現、自己と他者の情動の制御、自己と他者の情動の理解・分析、情動の利用という側面からなっている。情動認識力はこのエモーショナル・インテリジェンス概念の中の自己の情動の評価と表現、自己の情動の理解・分析を合わせたものであり、他者認識力は他者の情動の評価と表現、他者の情動の理解・分析を合わせたものである。本研究はエモーショナル・インテリジェンス概念の範囲を狭めて、その基礎的な能力と考えられるものを抽出して測定することにより、その有効性を実証的に検討した一つの試みとして位置づけることもできるだろう。今後、エモーショナル・インテリジェンス概念の中に含まれてはいるが、本研究では取り上げなかった側面、すなわち情動の制御、情動の利用を測定し、それらの関連性を検討することができれば、エモーショナル・インテリジェンスという包括的概念の有効性を実証的に検討することに寄与できると思われる。

引用文献

- 1) Davis, M., Stankov, L., & Roberts, R.D. (1998). Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 989-1015.
- 2) Gardner, H. (1983). *Frames of Mind*. New York: Basic Books.
- 3) Gendlin, E.T. (1981). *Focusing*. 2nd edition. New York: Bantam books. (ジェンドリン E.T.・村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳(1982). フォーカシング 福村出版)
- 4) Goleman, D. (1995). *Emotional intelligence*. New York: Bantam Books.
- 5) Guilford, J.P. (1967). *The nature of human intelligence*. New York: McGraw-Hill.
- 6) Mayer, J.D. & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In Salovey, P. & Sluyter, D.J. (Eds.) *Emotional development and emotional intelligence. Educational implications*. Pp.3-31. New York: Basic books.
- 7) 酒井久実代 (1999). 情動認識力とエモーショナル・インテリジェンス、アレキシサイミアとの関連性の検討 感情心理学研究, **6**(2), 57-69.
- 8) 酒井久実代 (2000). 情動認識力、語彙力、エモーショナル・インテリジェンスの構成要素間の関連性の検討 性格心理学研究, **8**(2), 79-88.

- 9) 酒井久実代 (2006). 情動認識力とストレス対処行動, ストレス反応との関連性について 日本女子体育大学紀要, **36**, 63-68.
- 10) Salovey, P. & Mayer, J.D. (1990). Emotional Intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9(3)**, 185-211.
- 11) Schutte, N.S., Malouff, J.M., Hall, L.E., Haggerty, D.J., Cooper, J.T., Golden, C.J., & Dornheim, L. (1998). Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, **25**, 167-177.
- 12) Sternberg, R.J., & Kaufman, J.C. (1998). Human abilities. *Annual Review of Psychology*, **49**, 479-502.
- 13) 梅本 守 (1994). 生命保全システムとしての情動 伊藤正男・梅本 守・山鳥 重・小野武年・往住彰文・池田謙一 岩波講座認知科学 6 情動 pp.1-34. 岩波書店

(平成18年9月13日受付)
(平成18年12月5日受理)